

# ティーンエージャーをアートへ!

ラース・ニッティヴ(ストックホルム近代美術館 館長)

ストックホルム近代美術館では、1960年代初頭から美術教育に取り組んできました。この度、開館したばかりで評判の金沢21世紀美術館が当館のティーンエージャー向けの革新的な新しいプログラムに大きな関心を寄せていると聞き、われわれの教育部門のキュレーターたちはこれまでにないほど喜び、勇気づけられています。

この喜びには二つの背景があります。何よりもまず、世界の全く違う場所の、しかも最近開館した現代美術館の中で最も魅力的な館の一つである貴館が興味を示してくれたという事実です。近年、西洋における日本は、グローバルな影響力を持つ若者文化との強い関連において認識されてきました。「若者の問題」が日本社会の中で懸念されているとも知り、そういった国からの関心にさらに誇りを感じます。

そして二番目は、ゾーン・モデルナが特にティーンエージャーと思春期の若者に焦点を当てていることと関係しています。小さな子どもたち(ティーンエージャーではなく)とアートとを結びつけることに夢中になってきた西洋社会における美術教育の長い歴史に対して、このことは真っ向から挑戦するものでした。子どもたちとアートとの密接な関係づけは、少なくとも啓

蒙思想のあたりから存在する考え方で、ロマン主義を経て近代に入り最盛期を迎えました。その意味で、アムステルダム市立美術館、コペンハーゲン郊外のルイジアナ近代美術館、そして我がストックホルム近代美術館も含め、1950年代以降に発展したヨーロッパの近代美術館において、小さな子どもたちを対象とした美術教育活動がモデルとして主流を占めたのはうなずける流れだったのです。子ども向けのガイドツアーや、絵を描いたり模型を作ったりといったワークショップは、やがて、野心のある近代美術館にとって必須のアイテムとなっていきました。

一般的に、このような傾向の背景には、「アート」が子どもの発達において有益だという考え方があります。多分これは正しいでしょう。私は、ヴィジュアルの要素に焦点を当てるのであればよいことだと思います。多くの研究が、子どもの発達にとって視覚的要素が重要な役割を担っていること、しかし時間の経過とともに、社会が重要視しているテキストがそれに取って代わることを指摘しています。ここで大きな障害になっているのは、アートと視覚性とを混同していることです。100年近くたつのに、まだマルセル・デュシャンが伝えようと試みたことの

意義を理解していないのです。もしかするとわれわれはモダニズムの遺産といってもよい昔懐かしいアイデア—「芸術家、愚者、子ども」の間の親和性—にまだ陥っているのかもしれませんが。このようなメンタリティは今日のアートの定義と真っ向から対立するものです。この定義とは、アートの根本的重要性を指摘するまでもなく、何かをアートと定義し始めている制度や文脈に加えて芸術作品の極端な複雑さを強調するものです。これまであまり語られてきませんでした非常に興味深いことは、子どもだけがアートと特別な関係を持ちうるというロマン主義的な近代主義者の見方は、美術教育の根本的な前提である「知れば知るほど見えてくる」という考えと全く反するという点です。

子ども向けの美術教育は間違いだと言っているわけではありません。ただ、あまりにも児童に焦点を合わせすぎた結果、アートとの出会いによってもっと恩恵を受けるだろうそれ以外のグループを美術館から遠ざける要因となったと指摘したいのです。ここで特に私が念頭に置いているのはティーンエージャーたちです。彼らは5歳や7歳の子どもたちほどかわいくはありませんし、おまけに怠けがちでだらだらとしていて

騒がしく、未熟な上にうるさいと考えがちです。しかし彼らこそ、美術館の観客の中でアート(そして新しいロールモデルとしてのアーティスト)が最も重要なものとなるだろうグループなのです。彼らはまさに人生の中で過去や両親の価値観や考え方から独立し、自分のアイデンティティを構築(また再構築)しようとしている時期にあるわけです。このようなティーンエージャーの立場とアートのそれは似ているのではないのでしょうか。アートと同じように、若者たちは境界や固定観念にチャレンジし、既にあるものを再構築したり、新しい何かを構築しようとしています。そして当然ですが、彼らは5歳児よりもアートをずっと深く知覚できます。なんといっても彼らの方がもっと知識があるのですから。

これが2004年に創られたゾーン・モデルナの基礎となる考え方です。逆説的ですが、美術館が最も優先順位を低くしていた層であるティーンエージャー向けのアートの可能性の認識することなのです。ゾーン・モデルナはティーンエージャー向けの美術教育のプログラム、あるいはアートプロジェクトと呼ぶべきかもしれません。学期ごとにおよそ20人の高等学校上級生たちと美術館のアートエデュケーター、そ

して先導役のアーティストが活動する中で、水の波紋が広がるように多くの人を巻き込んでいき、実際には毎年数千もの生徒や教師が関わるようになります。ストックホルム市内の様々な地域の生徒と学校がゾーン・モデルナを介して出会うのです。階級や人種、文化的な違いといったこの大都市を分断する境界を超えて交流しています。

12学期にわたって数百人の生徒が参加してきたゾーン・モデルナの今日までの成果はわれわれの予想をはるかに超えるものです。参加生徒の友人たちを含めた数千人がこの成果を美術館で目の当たりにし、今ではストックホルムのティーンエージャーたちにとって美術館に行くのはとても自然なことになりました。個人的には、生徒が、いわゆる上手な絵といったよく出来た作品から思いがけず飛躍して、アートを生み出す瞬間に出会うことがとても嬉しいのです。それは、絵が突然ユニークな意味を帯び、比類ない精度とオープンさを併せ持つユニークな何かが生み出される過程とも言えるでしょう。

美術教育は美術館が気にかけるべき唯一の対象である小さな子どもと大人のためのもの、といった既存概念にチャレンジし対抗する中で

ゾーン・モデルナは生まれました。そのような意味において、ストックホルム近代美術館の教育スタッフにとって、金沢の美術館の方々が自分たちの活動をみて理解していただくことが非常に重要だったのです。金沢のスタッフもティーンエージャーの美術教育に投資することの重要性を認識し、アートもしくはアーティストの役割に潜在する希望を感じているのではないのでしょうか。若者たちがややもすると世界の貧困や気候変動、戦争と抑圧に直面し、将来について悲観的になるのも理解できますが、メディアや娯楽産業が支配する中であってアートは未知なる逃げ道という方向性をもっています。もうどこにも逃げ場がないと感じるときでも、アートは何か別の感覚、つまり逃げ道のない構造にあっても必ず道は開ける、別の突破口があるという感覚をわれわれに持たせてくれるのです。端的にいえばアートは若い世代に希望を与えるのです! ゾーン・モデルナがそれを証明しています。そして金沢21世紀美術館のアートプログラムも同様にその証明を成功に導いています。何年にもわたっての刺激あるすばらしい交流を感謝いたしますと同時に心から5周年のお祝いを申し上げます。